

7月1日

生命の水の源
(エレミヤ記2:12,13)

「諸々の天よ、このことに驚け、慄け、いたく恐れよ、」とエホバ言ひ給ふ、「そはわが民は二つの悪事を犯せり。即ち生命の水の源なる我を棄て、自ら水溜みづためを掘れり。即ち崩れたる水溜にして水を保持得ざるなり」。(エレミヤ二・一二、一三)

預言者たちがしばしば民を責め、警告を発しているのは偶像礼拝という背信行為とそれに関連した他国依存であった。民族のそしてそれは同時に世界、万物の創造神たる実存主エホバ信仰と自由独立の気魄に生き且つそのことを叫んでやまないのが預言者たちであった。大気なくして呼吸は不可能。清水なくして体は保たない。だから生命の水の源は神であるとの表現は極めて自然である。特に水の乏しい沙漠地帯の多いカナン・イスラエルの地にあつてはこの表現は切実なものであつた。(エレ一七・一三、詩三六・九参照)。キリストがサマリヤを旅しておられたときサマリヤの女とヤコブの井泉のほとりで語られた言に「すべてこの水を飲む者はまた渴かん。然れどわが与ふる水を飲む者は永遠に渴くことなし。わが与ふる水はその者の中にて泉となり、永遠の生命の水湧き出づべし」(ヨハネ四・一三、一四)と。これこそ諸々の天よ驚けと叫びたい聖言である。エレミヤへのエホバの言の根源現実をキリストはもっていた。即ち彼は生命の源泉そのものであつた。今も無論のこと、永遠の生命を与え得る霊界の人である。この水は即ち聖霊である。この水なくして人にまことの生命なしである。

7月2日

我に帰れ！
(エレミヤ記3)

背向ける子らよ、我に向き直れ。我れ汝の背向きを直さん。(ホセア一

四・四参照)

視よ、我ら汝に來れり。実に汝は我らの神エホバなり。(三・二三)

エレミヤはこの第三章でしきりに神の本願たる「我に帰れ」の消息を伝えている。エレミヤの悲願「神に帰れ」もしばしば叫ばれている。そしてイスラエル、ユダの滅亡時のすべての預言者の祈りの焦点は「エホバに帰れ」であった。

然り、個人の、民族の、そして全世界の最大の問題は、神に、創造主に、絶対者に帰れに帰一する。絶対の一号の名を何と呼ぼうとそれは民族によってさまざまでよい。そしてその絶対者の性が、本質が愛である限り、世界は平和に向う。歎喜と讃美の世界となつてゆく。帰神を念願として生きない限り、妬み争いは絶えず、戦争は絶えず、遂には世界破壊となる。宗教とは何か。「我に帰れ」のみ声に全存在を以て回帰してゆくことである。

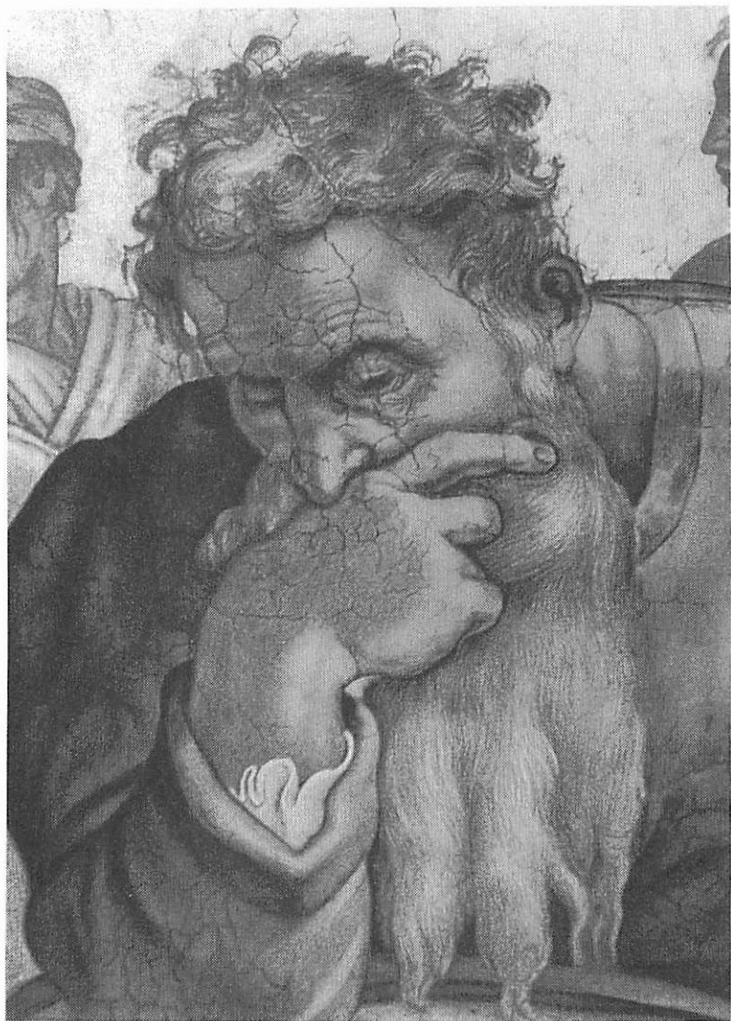
さてこの「背向ける」というヘブライ原語と「向き直れ」の原語は同根である。向き方が神に対して背向きか、真向きかで、百八十度の差で、神に向き入る帰入となるか、神に背向く離叛となるかで、天国か地獄か、救いか滅びかになる。原語は「シェーブ」という。「向く」という語。神に向きゆくから帰るとなる。新約の「悔改める」という語、これも実は神に向って「向きを転ずる」ことで「回帰する」である。神・キリストに回帰すること、而も帰入すること、祈入することが魂と存在の本当の相とならんことのみに。

7月3日

わが腸^{はらわた}よ、わが腸^{はらわた}よ！
 メーアイ、メーアイ！
 (エレミヤ記4)

わが腸^{はらわた}よ、わが腸^{はらわた}よ！ 我れ苦しきもだゆ。
 心臓の壁よ、心の奥に呻きあり、慎まらず。
 角笛の響き、戦の鬨の声をわが魂は聞く。
 潰滅に潰滅が迫り、此地は凡て荒れ果てぬ。
 わが幕屋遽かに破れ、わが天幕も瞬く間なり。
 いつまで軍旗を見、角笛の響を聞くらん。
 「愚かなる哉わが民、彼らは我を露知らず。
 彼らは愚鈍の子らぞ、解らず屋ばかりなり。
 彼ら悪業に智慧あれど、善行には無知なるぞ」
 地を見れば形失せ空莫、天を仰げば光なし。
 我れ山を見れば皆震ひ、丘もみな揺ぎたり。
 我れ見るに、見よ！ 人影ぞ無き。
 空の鳥もみな飛び去れり。
 我れ見るに、見よ！ 沃地は荒地と変り果て、
 すべての市邑エホバの目前に毀たれぬ、
 み怒りの炎を正面に浴びて。
 (エレミヤ四・一九—二六)

エレミヤはこの第四章で、神への立ち帰りを更に伝へ、形の割礼ではなく心の割礼をせよ！ そうでないと神の怒りが臨み、北方からの戦禍に襲はれると警告している。彼は武装を問題としない。預言者エレミヤはどこまでも心の在り方を問題としている。
 彼はある日、ユダ国滅亡の幻影を見た。それが上掲の詩句である。第二二節は神からの言。言々句々、断腸の念いの迸りである。



予言者エレミヤ（ミケランジェロ）

7月4日

一者の存在
(エレミヤ5:1)

「汝らエルサレムの街路^{まち}を走り廻り、その広場にて視よや、知れよや、尋ねよや。もしや一者を見出だし得るやを。〔即ち〕もしや一人の公義^{ミツコハート}を行じ、信実^{エムナー}を求むる者あらば、我(エホバ)この市^{まち}(エルサレム)を赦すべし。」(エレミヤ五・二)

エホバ神がかく問いかけ給うた。この問いに応え得る一者(口語的に言えば、一人の人)は実はエレミヤであつたにちがいない。しかしエレミヤはアナトテというエルサレム北方の寒村の出身である。一人の義人があれば全エルサレムを赦すという聖言がかつたということとは、如何にエレミヤが個人の存在の貴さを開示する使命を帯びた預言者であつたかを知る。これはイエスの宗教への指標である。「人全世界を得るともおのが生命(魂)を失はば何の益あらん。」と喝破したのはキリストであつた。地球を右の皿に乗せ、一者を左の皿に乗せて天秤に懸けると左の方が重くて右があがる、という逆理である。一人の魂の貴さは無比なものだということである。一人の人格は代用が効かぬということである。失はれた一人の子供は親にとって全世界とも代えられないものである。迷える羊一匹をとり戻すためには九十九匹を問題にしないでさがし求める神の心なのである。それゆえ、一人の義人あらば、それは全エルサレムを赦して可なる貴さがあるとの神の心である。その極限の消息が、神の子イエスに於て証しせられた。即ち完璧な義人キリストの十字架の贖罪死は彼を信受する如何なる人の罪をも贖う力をもっている。合掌のみ。

7月5日

獅子と狼と豹
(エレミヤ記5)

この故に林よりいづる獅子は彼らを殺し、

曠野の狼は彼らを滅ぼし、

豹はその市邑を狙ふ。

其処より脱出する者は皆裂かるべし。

そは彼らの罪は夥しく

その背叛は甚だしければなり。(五・六)

神は聖憤のあまり、エレミヤに「我汝の口の中にてわが言を火となし、此の民を薪となさん。その火彼らを焼き尽すべし」(五・四)と叫び給うた。右掲の預言の冒頭の「この故に」とは、要するに不信、不義、偶像崇拜の民の在り方の故に、というわけである。獅子や豹や狼の如き野獣は預言書にしばしば現はれてくる。この場合、剽悍な北方のスクテヤ人や獐猛な東方のバビロニヤ軍などが暗に意味されてもいる。また実際これらの野獣にやられることもあろう。要するに神の審判の具である。

ところでイタリヤの大詩人ダンテの『神曲』地獄篇第一歌を見ると、彼が太陽の輝く山に登るべく坂道にさしかかったら、まづ豹が現はれ、次には獅子が立ち塞ぎ、遂には狼が立ちはだかったので、彼は登ることを断念せざるを得なかった。それはダンテが豹に於て肉慾を、獅子に於て傲慢を、狼に於て慾心を象徵せしめ、人間は肉慾、自己主張の自我心、諸々の物慾に、要するに自我心に勝てない罪びとであることを詩的に表現した。それはこのエレミヤ五・六を契機としたに相違ない。聖霊で内的変貌を賜るとこの三獣に勝つ。

7月6日

預言者の宗教
(エレミヤ記7:1-7)

「これはエホバの宮なり、エホバの宮なり、エホバの宮なり、といふ虚偽の言を汝ら頼みとする勿れ。汝らもし全く汝らの道と行を改め、人とその隣人との間の審判を正しく為し、異邦人と孤兒と寡婦を虐げず、辜無き者の血をこの処に流さず、地神々に従ひて禍害を招かずば、我汝らをわが汝らの先祖に与へしこの地に永遠より永遠まで住まはしむべし。」(エレミヤ七・四一七)

預言者エレミヤに臨んだこのエホバの言に、預言者の宗教の本質がよく現はれている。神との美しい深い実存関係が立っていて、他の神々と関はりのないことが大前提である。

この拝一神が真に実存的であるところは即ち唯一神の現実に突き貫ける。それは大らかなまたゆたかな愛の実存の実を結ぶ。決して他の神々を拝する者を排斥しない。大きく包擁する。それゆえ「異邦人を虐げず」という広さを有つ。昨今のイラン、イラクや近東諸国の角逐は何たることか。「孤兒と寡婦を虐げず、無辜者の血を流さず」という、弱者への愛を預言者はまた繰り返し叫んでいる。これは単なる道徳ではない。神との深い霊的人格の交りから来る力ある愛の花であり実である。

神殿礼拝の宗教行事をこととして、日常生活に於て神の義の証者として正しき審判をなし、愛の証者として弱者、貧者、不幸な人たちを助けなかったら、「エホバの宮」のお題目は空虚であり、虚偽である。

7月7日

泪の泉
(エレミヤ8:18 [19] — 9:1 [8:23])

ああわが首水となり、わが眼泪の泉とならんことを！ わが民の乙女の屠られたる者のため昼も夜も泣きてん。(エレミヤ九・一、原文では八・二)

三

南王国ユダが滅亡に瀕した頃、偶像崇拜と社会的紊乱でエルサレム市民の生活が極度に頹廃的となつてゐるのを見て、エレミヤは深く嘆いてゐた。外敵バビロニアの軍がエルサレム及びその周辺に襲いかかつて来た。ユダの国民が殺害される悲惨なありさまを見ては、暗涙に咽ぶのであつた。右掲の詩句はそのまま預言者エレミヤの熱泉のような涙であつた。わが国が自ら招いた第二次大戦で惨憺たる敗戦を喫し、日本全土のめぼしい都市が爆弾、焼夷弾の猛撃の餌食に供せられたときの惨状は言語に絶するものであつた。況んや広島、長崎の原爆に至つては目もあてられぬ地獄そのものであつた。無量の血が流れる遑もなく炎に化し、無量の涙が一瞬にして乾た。肉はただれ、骨が散らばつた。

戦争！ 歴史は戦争史か。人間の最も人間らしからぬ姿であると同時に、人間の最も露骨な姿である。人間の極限的曝露の相である。

「人の世はどうしてこうであるのか」詩人ダンテの顔はこのような憤りの表現だとカール・イルがその「ダンテ論」の中で書いてゐる。ダンテはまた泪の詩人であつた、「多くの人々及びさまざまな傷はわが眼をいたくも酔はしめ、目はとどまりて泣かんことを願へり」(長江訳)。

沖繩の惨劇「白百合の乙女ら」が今宵天界にて夫々牽牛的青年と相抱かんことを！

7月7日

(詩) 戦尽きせぬ人の世や

作詞1980.10.16

歌調「荒城の月」滝廉太郎作曲

戦尽きせぬ人の世や

1 戦^{いくさ}尽きせぬ 人の世や

そのみなもとは 我愆^{がけん}なり

有無相通ひ あたへなば

楽しき平和 来るものを

2 闘争^{かくぎ}絶えぬ 人の世や

幾千年の 血の叫び

野にも山にも 余韻あり

神の審判を 祈り待つ

3 妬み争ふ 人の世や

神のみに 平伏^{へいふく}して

主の十字架の 贖罪^{あがなひ}と

愛のみ霊に あづかれよ

4 世紀末なる 人の世や

武器を投げすて 鍬^{くわ}を執れ!

かたみにゆるし 愛せずば

世界はやがて 自滅せん

5 あなおろかしき 人の世や

救いがたきは 人の罪

宜^ふベキリストの 十字架は

世の終末^{おはり}まで 現実^{うつつ}なり

6 十字架の下^{もと} 相つどひ

深く祈れば 必ずや

み霊くだりて 甦^{よみがえ}り

歎^{なげ}びに満ち 聖名讀ふ

7 ここにはじめて 平安の

神の国こそ 臨むなれ

み霊の力 身に満ちて

道を伝へん いつまでも

7月8日

唯だ神を誇る

(エレミヤ記 9 : 23, 24)

[原文 9 : 22, 23]

三
エホバかく言ひ給ふ『智慧ある者はその智慧に誇る勿れ。力ある者は其の力に誇る勿れ。富者はその富に誇ること勿れ。誇る者はこれを^{もて}誇るべし。即ち明哲にして我れを知る事と、わがエホバにして地に仁恵(愛)と公正(審判)と公義(義)とを行ふ者なるを知る事是れなり。我れ是らを悦ぶなり』(エレミヤ九・二三、二四。原文は九・二三、二

三)

道徳の世界では矜持^{きやうぢ}というプライドを持つ心根が大切であろう。それは自信や自重の觀念とも通じる。しかし宗教の世界に來ると神・キリストを実存の根柢とするから、矜持といたった氣持が止揚されて、次元の高次な神・キリストを誇る心根となってくる。「誇る」の原語は「讚美する」と同語である。使徒パウロは、律法を實踐して、律法を行ずる義に就いては責むべきところなしとまでおのが義を誇り、矜持の念が強かったが、キリストの福音の義に出遭って、けたちがいなことを知り、「律法の義」を塵芥の如く棄てて、「キリストの義」福音の義を誇りとするに至った。パウロほど美事な質的変革を體現した人物はないといつてよからう。

エレミヤは旧約の世界で既にそれを體現していた。それはエホバに捉えられ、その言に於て行為に於て神意を伝え、神意を行ぜしめられて神を知ったからである。エレミヤはエホバ、実存主を誇るほか何もなかった。だから人間の側の何ものをも誇るな、それらの根源は皆神から來ている恩恵ではないか、恩恵を私する勿れ、というわけであった。

7月9日

義しきかな神は！
(エレミヤ記12：1)

義しきかな汝エホバは！ 我が汝と諍ふときに。惟だ汝が審判の
ことを我れ汝ともの言はん。何故に邪惡なる者の道の榮ゆるや、悖
れる者すべて安泰なるは何故ぞや。(エレ二・二)

東西古今、いついづに於ても人間社会では、暴力、悪たくみ、悪智慧のある奴らがの
さばり、榮える。道に外れた連中が巧智があつて安泰である、という現象が多く見られる。
正直者は馬鹿を見る。弱い者は推し除けられる。エレミヤは特に心の預言者であつたか
ら、こういう現象を見て、心を痛め、深く悲しみ、烈しく憤った。「彼らは口では、神様、
あなたに近づいているように言巧みに言いますが、心はあなたから遠かっているのです」
(二・二)。とエレミヤは更に訴えた。さて我々は眼を転じて獸類その他一般動物界を見、
或は植物界を眺めてみても大体同じことが言えはしまいか。強食弱肉であり、雜草跋扈で
ある。どんなにこの世は不公平であり、矛盾だらけであらうとも、「世界の審判」は必ず
来る。そのとき不公平、不義の行はれた社会、国家の諸々の悪現象が根源現実では審判さ
れていることが顕現される時が来る。虐げられている人々は、それでも「神は義しい」と
信じ抜き、耐え貫くに如かず。不義を以て榮えた人々は次の世界で必ず神から地獄に落さ
れる。エレミヤの抗議に対して神の答はなくて可い。神の審判は現象界の奥の世界でなさ
れつつある。然り、神は大乗的な義を以て審いておられる。

7月10日

麻帶

(エレミヤ記13)

エホバかく言ひ給ふ「汝往きて麻の帶おびを買ひ、汝の腰に結べ、水に浸す勿れ。」(二三・一)

エレミヤは一つの具体的な行為を以て預言することを命ぜられた。麻の帶を着けることは祭司の相を表はす(出二八・三九―四二)。エレミヤが祭司の家柄であつたからであらう。神はこの麻帶を着けてベラート(多分エレミヤの故里アナトテの北東にある谷間)へ行き、その洞窟にその帶を隠すように命じた。彼はその如くした。かなりの月日が経つと、また神命によりその帶を取り出したところ、もう朽ちて役に立たぬ有様となつていた。すると神は宣うた。「我此の如くユダの驕慢たかぶりと都エルサレムの大いなる驕慢を破る」と。民は剛愎で偶像を拝しエホバから離反している者が多かつた。エホバは更に宣うた「帶の人の腰に着くが如く、我れイスラエル及ユダのすべての家を我に着つかしめ、これをわが民となし、名となし、誉ほまれとなし、榮さかえとなさんとせり。然るに彼らは聴かざりき」(二三・一二)。

この故事に倣つてアッシジのフランチェスコは托鉢僧として麻帶を結んでいた。彼はキリストの真相の一証者となつた。麻帶は魂の相が無的謙虚な徴である。我々は存在そのものがキリストの麻帶となつて、キリストに密着して歩きたいものである。パウロは「信しん眞しんを帶として」(エペソ六・一四)と言っている。ヘブライ語で言えばエメツ、エムナー、アーメン、本然的全諾で、神という眞を信受している相を帶とすることである。かくて神・キリストという眞を現する証者たらんことである。

7月11日

エレミヤの執成しの祈り

(エレミヤ記14:7-9)

縦^{七たと}ひ我らの罪我らに対して證^{あかし}をなすとも
噫エホバよ、汝の聖名のために処し給
へ！

まことに我らの離叛^{そむき}の業^{わざ}は多々あり。

汝に対して我ら罪を犯したり。

お^ハおイスラエルの希望主^{のぞみぬし}よ。

患難^{なやみ}の時の救主^{すくいぬし}よ！

如何なれば汝この地の異邦人^{ことくにびと}の如くし、

寄宿^{やどり}する旅人の如くし給ふや。

如何なれば汝茫然たる人の如くし、

救ふこと能はざる勇者の如くし給ふや。

噫エホバよ、されど汝は我らの真中^{まなか}に在^います。

汝の御名の称揚はわれらの頭上にあり。

汝見棄て給ふ勿れわれらを！(二四・七—九)

預言者エレミヤにとってエホバは存在のアルバでありオメガであった。その聖名は何ものによっても害を受けない実力であった。

エレミヤがイスラエル民族を思うことは聖名のゆえ、聖名のためであった。真の愛国とは此の如き神主体の意識である。しかもエレミヤにとってイスラエルは自分と一つであった。彼らの罪はわが罪であった。民の罪を怒ると同時に民の罪を自ら負う愛の心であった。執成しの祈りといってもそのようなずれのない連帯意識であった。

神は聖名のゆえに民の罪を、一人の義人エレミヤの執成しによつてゆるし給ふ。神は罪びとの真中に臨在する、民は神の聖名を以て称えられている聖名ゆえの民である。義の故に投げ棄てながら、愛の故にこれを抱き揚げる。個人も民族もそういう神に在ってこそ。

7月12日

しやこ やから
 鷓鴣の族
 (エレミヤ記15-17)

○「汝卑俗を棄てて高邁を出ださば、我が口の如くならん。彼らをして汝に帰らしめよ、されど汝は彼らに帰る勿れ。……我汝と偕にありて汝を助け汝を救へばなり。」(二五・一九下、二〇下)

○「汝此処にて妻を娶る勿れ。また子女を得る勿れ」(二六・二)

○心は何物よりも偽るものにして度し難し、誰か知るを得ん(二七・九)

○鷓鴣の己が産まざる卵を抱くが如く不義をもて財を獲る者あり、

其の人は生涯の半にて之に離れその終末は愚者とならん(二七・一二)。

エレミヤ一五——七章の中の著しい句をひろって見た。○大衆、庶民に阿おしなつて卑俗な雑本や漫画、テレビ、ビデオが横行跋扈している現代日本の精神文化は何処にあるのかと神は、このエレミヤへの言を發してあり給う。むしろ民衆のレヴェル・アップのために高邁なる内容のものを投じて、彼らを高次な世界へ帰入せしめよと。

○北王国イスラエルの如く、南王国ユダが將に亡びなんという夕暮時、エレミヤは家庭をもつことを断念させられた。ハートの深いエレミヤにとってこれは悲涙の事態であつた。

しかしエレミヤは民衆の心を愛した愛国の預言者。彼は国を妻とし子女としたのであつた。○噫、人の心は究め難い。濟渡し難い。「偽」は自他への、そして神への裏切りであつて最も質の悪い罪である。○所謂土地転がしもこの鷓鴣のようなものだ。土地は神有である。故に土地は国有となし、国民は国から借りて使うべし。政治が弱い、悪い。

7月13日

陶工と陶器

(エレミヤ記18: 1-12)

「汝^ニ起ちて、陶人の家にくだれ。我彼処にてわが言を汝に聞かしめん。我れ即ち陶人の家にくだりて視れば、轆轤をもて物を造りおりしが、その陶土をもて造れる陶器陶人の手のうちにそこねたれば、彼思うがままにこれをもて別の陶器を創作せり。(二八・一四)

神はエレミヤに国家存亡の事態を啓示せんとて、彼を陶人の現場に導き給うた。エレミヤは、轆轤を脚で廻転しながら陶土から陶器を創作する陶工の技術を、じーっと見ていた。すると折角の陶器製作の途中で出来そこないとなった。それで陶工はそれをこわして新しく陶器の造り直しをして別な陶器を仕上げた。

この陶工と陶器の事態の如く。どの民族も神の聖手の中にある。その民族が陶工たる神の意向に反してできそこないとなったら、即ちその民の実存が神に叛く方向に向ったら、陶工たる神は、その民が懺悔しない限り、これをぶっ壊して別な民族を起す。即ち救済の神の根源的な意志に常に新たに立ち帰ることが救はれる角度であるが、立ち帰らないならば自ら滅亡を刈りとることになる。

イスラエルの民は、選民でありながら、預言者たちの警告を無視したのが大方で彼らは竟に滅亡を刈り獲った。そのできそこないの中から併しナザレ人イエスが出現した。ところがイエスはできそこないの民によって十字架に懸けられた。このイエスという陶器は神の絶品であった。この絶品に圧倒されてできた逸品が使徒たちであった。

7月14日

聖言は火の如し
(エレミヤ記20：7-18)

七
エホバよ、汝我をたぶらかし給ひ、げに我はたぶらかされたり。
汝は強し、我に勝ち給へり。われは日ねもす人の笑ひ草となり、人
みな我を嘲る。われ口を開く毎に「暴逆」と叫び、「掠奪」と呼ば
はる。エホバの言はわが身の恥辱となり、日ねもす嘲弄となるなり。
我れ「彼のことを口にすまじ、御名に在りて語らじ」と言はば、わ
が胸の中に燃ゆる火の如きものありてわが骨の中に閉ぢこもり、忍
ぶに疲れて抑ふるに耐えざるなり」

(エレミヤ二〇・七-九)

エレミヤは神の言をまともに受け、そのまま民に伝えていた。その結果はつねに嘲笑や
迫害や誤解や恥辱となつてわが身に返つて来た。これでは神にたぶらかされたも同然だ。
それでもう聖名に在つて語るまじ、叫ぶまじと思ふが、胸の中に神のみ霊が燃える火の如
くで、しかも骨の中にそれが閉ぢこもるので到底これを抑えることができないと告白した。
彼はまたこゝも告白している。「エホバとその聖言のためにわれは酔える人の如く、酒に
勝たるる人の如し」と(二三・九)。

神霊、キリストの霊、聖霊に圧倒され、漲り溢れていると、聖言が、神の思想が泉の如
く湧き出で、火の如く燃え立つので、舌端に迸り、筆端に走るのである。そういう聖言は
人の魂にひびく、人の身に浸透してくる。聖書はそういう聖言の波の聖霊の風の疾風怒濤
の書である。

7月15日

生き無花果

(エレミヤ記24:1-7)

五

イスラエルの神エホバかくいふ、『我れらが此の地よりカルデヤ人の地に逐ひ遣りしユダ国の捕囚の民を此の「佳き無花果」の如くに顧みて恵まん。我彼らを顧みて之を恵み、彼らを此の地に帰らしめ、彼らを建てて仆さず、植えて抜かじ。我彼らに我れのエホバなるを識るの心を与へん。彼らわが民となり、我れ彼らの神とならん。彼らわが許にその総心を挙げて帰り来らん。』(エレミヤ二四・五—七)

エレミヤの生涯は、ユダの国王マナセ(在位紀前六九三—六三九)の晩年から、アモンヨシヤ(六三八—六〇八)、エホアハズ、エホセキム(六〇八—五九七)、エホヤキン、ゼデキヤ(五九七—五八七)の諸王の時代を貫いている。生誕は六四五年頃、預言活動はマナセ王の晩年の六二六年からバビロニヤ王ネブヤドネザルが首都エルサレムを攻略し、かの決定的なバビロニヤ(カルデヤ)捕囚の時(五八七年)にまで及んでいる。

「佳き無花果」とは、彼が捕囚の際見せられた神殿の前の二籠の無花果の靈幻の中の佳く熟した無花果のことで(二四・二)、イザヤの預言の「遺れる民」の如く、捕囚期(五八七—五三八)のあとまで、世代は変つても、エホバの聖心を知る民の必ずあることの預言である。預言者ホセヤやエレミヤの「知る」という言は神との靈交の深い消息である。「我は彼らの神、彼らはわが民」という表現は深い靈的人格的關係で、「彼らわが許に総心を挙げて帰り来らん」とは何と熱烈なる神人關係か！ 神の本願をかく伝えたエレミヤは全身を涙としていたであらう。

7月16日

罪無き者の血
(エレミヤ記26)

見よ、我は汝らの掌中にあり、汝らの目に善しと見ゆるところ義^{ただ}しと見ゆるところを我に為せ。然れど汝ら確か^いとこのことを知れ、汝らもし我を殺さば必ず罪無き者の血は、汝ら自身とこの市^{まち}とこの中の住民に帰せん。エホバ我を遣はしてこのすべての言を汝らの耳に告げしめ給ひたればなり(エレミヤ二六・一四、一五)

エレミヤは「火の如き」神の言、「磐を打ち砕く鉄槌の如き」エホバの言を告げ、「偽りの預言者らの敵となる」と三度びも語り給うたエホバの言を伝えたりして(二三・二九—三二)、憚^{はば}ることがなかったので、迫害に遭った。祭司と偽りの預言者どもと庶民が遂にエレミヤを執^とへた。ユダの牧伯^{もくはく}たちも王の家からエホバの神殿にやって来て新しい門の入口に坐りこみ、彼を訴へ詰った(二六・一〇、一一)。しかしエレミヤは叫んだ、「エホバは我を遣はし、汝らが聴けるすべての言をもて此の宮殿とこの市に向つて預言せしめ給へり。故に汝ら今汝らの途と行為とを改めて汝らの神の声に従へ、然らばエホバ汝らに災^{わざわい}を降さんとせしことを悔い給ふべし」(二六・一二、一三)。

この言のあとで彼は右掲の決死の言を吐いた。エレミヤのこの決然たる言に打たれて、牧伯たちはエレミヤを本当の預言者として彼を重視するに至った。

エレミヤの愛国心は武力を以て抗するのではなく、バビロニアに対して善隣の心をもつことにあった。どこまでも神の言に信じ入り、義と愛の道を実践するにであった。「エホバは我らの義なり」(二三・五一—八参照)として、神の義を行ずることを正道とし救となした。

7月17日

本願によって立ち帰る
(エレミヤ記31:18〔17〕—20〔19〕)

汝は我を懲しめ給ふ。我は軋に馴れざる憤の如くに懲しめを受けたり。エホバよ、汝はわが神なれば、我を引き帰したまへ、さらば我れ帰るべし。われ帰りし後に悔い、教を受けしのにわが髀を打つ。我れ若き時の羞を身にもてば恥ぢかつ辱しめらるるなり。

エホバ言ひ給ふ、「エフライムはわが愛する子、悦ぶ子ならずや、我れ彼に就きて語ること彼を切に念はざるを得ず。是をもてわが腸は彼のために呻く、我れ彼を恤み恤む。」(三一・一八—二〇)〔二七—二九〕

エレミヤはエフライム(歴史的にはヨセフの子。有力な支族でイスラエルの別名の如く用いられた)の立場に自分を置いて告白している。

「汝我を引き帰し給へ、さらば我れ帰るべし」の一句は、極めて注目を要する。エレミヤは神の力と神の恵み、即ち神の本願の効力に全的に圧倒され、信頼している。こちらからはなかなか立ち帰れない。自分の信仰なんていうものはあてにならない。あてになるのは神の恵みの力。「あなたが私を引き帰して下さいよ、そしたら私はみ力によってみ許に帰ります」という。果然、エフライムは神の愛する子であった。二〇節前半は神がキリスト・イエスにヨルダンに於ける受洗のとき語りかけた聖句である。エフライムの現状は神の「呻き」を喚起するものであった(ロマ四・二六)。さはれ、この全身的投入の信仰、即ち信仰に、信仰の奥義がある。み力にあづかって始めておのが無力を知ると、全身が神の霊の力に満ちて、行動的にならざるを得ない。

7月18日

新契約

(エレミヤ記31:31〔30〕—34〔33〕)

「視よ、期^{とき}は来れり、」とエホバ^{のたま}宣ふ「我れイスラエルの家とユダの家とに新契約を結ばん。これは、エジプトの地より導き出だせし期^{とき}に彼らの先祖と結びし契約の如きものに非ず。我れわが律法を彼らの腸^{はらわた}の中に置かん、彼らの心に書き記さん。かくて我は彼らの神となり、彼らはわが民となる。彼らは再び各々その隣人に、各々その兄弟に教へて、汝らエホバを知れ、と言ふこと無し。そは彼らは皆いと小さき者よりいと大いなる者に至るまで我を知るべければなり、」とエホバ言ふ「そは我れ彼らの不義を赦し、彼らの罪をまた憶はざるべければなり。」(三一・三一…三四、原文三一・三〇…三三)

これが有名な、画期的な、エレミヤに告げられたエホバの新契約で、新約聖書のキリストの福音への橋渡しの如きものである。さすがは心の預言者エレミヤらしい預言内容である。新しい律法はあたまで憶え、うわべで行ふ律法ではなく、腸の中に刻み込まれ、心の中に書き記される内面的な全身的な律法で、おのづから行為に表現されざるを得ない質のものだという。その超律法は何か、我々の「不義を赦し、罪を憶はざる」愛であった。噫預言者エレミヤの心はイザヤ書五十三章と相照応するものであった。即ちキリストが身を以てこれを体現し、十字架の贖罪をなし、聖霊を降し給うた恵みの愛の預言であった。

7月19日

永遠の契約

(エレミヤ32:37-41)

見よ、我わが怒りと憤りと激怒をもて彼らを逐ひ放てる諸々の国より彼らを集め、此処に立ち帰らしめ、安泰に居らしめん。彼らはわが民となり、我は彼らの神となる。我れ彼らに一心と一道を与へて、常々我を畏れしめ、以て彼らと彼らのあとなる子らに善福あらしめんためなり。我れ彼らより離れ去らず、彼らを祝福すべき永遠の契約を彼らと結ばん。我れ彼らを悦び、彼らに善福を施し、心を尽し魂をこめて信実をもて彼らを此地に植えつけん。(三二・三七-四一)

これはエホバがエレミヤを通してイスラエル民族、契約の民へ与えた「永遠の契約」である。「新契約」は彼らの心腸に与えた新律法、謂はば無法の法であつたが、この「永遠の契約」はアブラハム以来の約束の地カナン、パレスティナ、今のイスラエル国の地に定住すべき契約である。神への不信のため、神の怒りを買った北王国イスラエルも南王国ユダも、神の怒りの、審判の手脚となつたアッシリヤ及びバビロニアに亡ぼされたが、預言者らを通して遂に神に立ち帰るに至り、神の愛憐、善福を受け故国の地に戻つた。最も大切なのは神から賜はる「一心」であり「一道」である。一心とは何か、神との一如の心である。一道とは何か、神意の貫く天道である。即時即場が天道に即する地路である。イスラエル民族は遂に一九四八年に昔ながらの聖地に独立共和国を創立した。エレミヤへの神の永遠の契約の本願は事実となつた。しかし愛の一心一道の体現や如何。

7月20日

断罪に因る滅亡の現実
(エレミヤ哀歌1)

噫、侘しらに居残るか民の満ちたりしこの都。
諸民の中にて大なりしもの寡婦の如くなり、
諸々の地域の中にて女王たりし者貢を納るる
者とはなりぬ。
彼女に夜な夜な痛く泣き、その頬に涙を浮べ、
その友らはみな背き、その仇人となり果てぬ。
ユダは迫害のため、大苦役の爲に據はれゆき、
諸々の国民の中に住ひて安息を得ず、
義しきはエホバ、我その神命に叛けり。
聞かずや総ての民よ、わが哀愁を顧はずや！
わが処女もわが青年も俘囚はれ往けり。
エホバよ顧み給へ、我に苦悩あり、わが腸湧
き返り、
わが心衷に顛倒。我悖りに悖りたれば。
外には劍の虚殺、家には死の様相ぞ。

(エレミヤ哀歌第一章より)

「エレミヤ哀歌」は原文ではただ「哀歌」(「エーカ」)と謂ひ、語意は「如何んぞや!」「噫!」といった慨歎の言葉。作者不詳。エレミヤ的である。各章各節の頭音は所謂いろは歌的。南王国ユダの首都シオン・エルサレムがバビロン王ネブカドネザルの軍に攻略され、神殿は破壊され、首都の戦禍は惨憺そのもの、地獄の如くになった。主な人々は(紀前五九八年と五八七年に)捕囚となつてバビロンに運はれた。この滅亡は神のユダ国への審判に因る。作者は預言者魂でその罪を告白している。

7月21日

聖憤に因る惨状

(エレミヤ哀歌2)

噫！主はその憤激をもてシオンの娘を暗雲に鎖し、イスラエルの栄光を天より地に擲げおとし、その憤怒の日に己が足台を心に留め給はざりき。

幼児らはその母たちに言ふ、パンと葡萄汁は何処に。彼らは致命傷を負へるか市の巷に墜れ果て、その魂は母の胸に寄り添うて消え入るばかりなり。

エホバよ、覽し給へ、婦人その実にして抱き育てし孩兒を食ふべけんや。祭司、預言者ら、主の聖所にて殺さるべけんや。

(エレミヤ哀歌第二章より)

バビロン軍に蹂躪されたエルサレムの惨状を目撃した人の詩句である。ここに挙げたのはその一部にすぎないから、哀歌を読んでいただきたい。第二次世界大戦を体験した我らには哀歌の悲惨な光景はまざまざと眼に映る想いがする。

イスラエル民族を愛する神の怒りの審判の凄さの現実である。母親がその幼兒を食うに到つては狂気の沙汰である。(エレミヤ一九・九参照)。ダンテの『神曲』地獄篇第三三曲に於て描かれている牢獄に閉ちこめられたウゴリイノ伯とその子及孫らの餓死の際の喰うか喰はれるかの深刻な問答を想う。戦乱は人を地獄の鬼にする。すべては神を無みする人間の罪の果である。

7月22日

苦難の中に神在ます
(エレミヤ哀歌3)

神^三の愛憐^{あはれみ}はげに絶えず、その恩愛^{いつくしみ}限りなし。
 こは朝ごとに新なり、汝の信実は大いなり。
 エホバはわが分前^{ぶんぜん}、我れ彼を待ち望む。
 人若き時に軛^{くみ}を負ふは善し。
 神これを負はせ給ふ、独り坐して黙す。
 口を塵につけよ、望みあり。
 禍も福も共に至高者の口より出づるに非ずや。
 我ら天に在ます神に向ひて手をも心をも挙ぐ。
 主よ、汝はわが魂の訴を助け、わが生命を贖^{あがな}
 ひ給へり。
 エホバよ汝はわが蒙うたる不義を見給へり。
 願はくは我がため義しき審判をなし給へ。
 汝み怒りをもて彼らを追ひ散らし、
 エホバの天の下より彼らを亡し絶ち給へ!

ヘブライ語の字母は二二、本章は六六節から成り、三節づつ節頭の字母が「イロハ」順になっている。全章の内容は、神の審判を正直に受けつつも、審判の義の奥に神の愛を救を贖ひを信じ、現実の苦難の中で既に神の力を受け、且つ歎喜の将来を待ち望んでいる。「エホバはわが分前なり」とは何と大乗的な信仰の叫びなる哉。私は告白する「キリストはわが分前なり」と。キリストを有って他に何が要るか。二七、二八、二九の三節は私の忍耐の慰めの力となった聖句である。

7月23日

本願回帰

(エレミヤ哀歌4:5)

第四章 山犬すらも乳房を垂れてその子に乳を
哺ます。

然るにわが民の女は残忍く荒野の駝鳥の如し。
手づからおのが子らを煮て食となせり。

斯くなりしは預言者ら、祭司らの罪による。

彼らは即ち義人の血をその市に流したりき。

第五章 饑饉の烈しき熱気によりて我らの皮膚
は爐の如し。

シオンにて女たち犯され、ユダの町々にて処
女ら穢さる。

エホバよ、何とて我らを永く忘れ、我らを斯
く久しく棄て給ふや。

エホバよ、我らを汝に帰らしめ給へ、我ら回
帰せん。

我らの日を新に昔日の如くならしめ給へ！

戦争は人間を鬼畜を上廻
はったものにする。人間が
地獄を作る。その反面人間
の中には悲惨の中に輝かし
き天国を現する人もある。
天国、極楽への道に昇り
往くか、地獄、陰府への道
に降り往くかは、各人の自
由に任せられてある。

神の都エルサレムの娘
(市民のこと)が斯く成り
果てたのは偽の預言者と祭
司らに原因があったとエレ
ミヤは叫んだ(エレミヤ二
三・二九―三三)。

罪を犯しても転んでも贖
いても、神に立ち帰らんと
の願は棄てないイスラエル
民族は、神の永遠性を身に
帯びた民族である。「汝に
帰らしめ給へ」の本願回帰
の祈りは本ものだ！

7月24日

起死回生への預言

(エゼキエル書11:18)

○我^ニ彼らに唯だ一つの心を与へ、新しき^ニ靈を汝らの衷^{うち}に賦^{さづ}けん。我
彼らのからだの中より石の心を取りさりて肉の心を与へん。彼ら^ニ
してわが法規^{のり}に遵^{したが}はしめ、わが律法^{おきて}を守りて之を行はしめんがた
なり。然らば彼らはわが民となり、我は彼らの神とならん。(エゼ二・

一九、二〇)(三六・二六・二七参照)

○汝^ニらその行ひしすべての罪を棄て去り、新しき心と新しき靈を己
れに起^{おこ}すべし。然^されば汝ら回帰して生きよ。(二八・三一、三二)

エゼキエルという預言者は青年期に第一期バビロン捕囚(紀前五九七年)の中にいた。彼
は祭司的預言者であり、人間の素質からいくと神秘的靈幻を見る神秘家であると同時に健
全な理性も備えているので、現実をよく観察している。ルターがイザヤの靈統とすれば、
カルヴァンはエゼキエルの靈統と言えよう。

右掲の二句は相照応する内容で、「新しき靈」は新約の聖靈の徴と見て可い。「石の心」
は頑^なくな心でバリサイ根性に通じる。「からだ」と「肉」は同じ「バーサール」という原
語である。この場合の「肉の心」は所謂情慾ではなく、「あたたかいからだ」に宿る心で、
「肉」は神から賜った「からだ」で粗末にしてはならない、靈肉渾然一如たるべき肉であ
る。不変の「唯だ一つの心」は「新しき靈」と照応する。こういう新人が死んではならな
いと悲願のこもった句で、神は死を負う人間の死を好み給はない。元来永遠に神と共に
生くべき人(靈止^{ひと})なのだ。神の創造力で起死回生せよ!

7月25日

義人の義はその人に帰す
(エゼキエル18:20-24)

罪を犯せる魂は死すべし。子は父の罪過を負はず、父は子の罪過を負はざるなり。義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰するなり。(エゼキエル一八・二〇)

この聖言は現代的な性格のものではないか。モーセの十言第二言の説明的な聖言には「我エホバ汝の神は妬む神なれば、我を惡む者に向ひては父の罪を子に報いて三、四代に及ぼし、我を愛しわが誠命を守る者には恩恵を施して千代にいたるなり」(出二〇・五、六)とある。

神と人との関係はどこまでも一対一の関係で、こういった功罪の因果関係は勸善懲惡的ではないか。封建時代には罪過の連帶性があつて、どれほどの善良な庶民が無実の罪を帰せられた上に血族まで連帶の罪を負はされて、涙と血を流したことか。

エゼキエルに示されたこの聖言は光を放っている。しかもその聖言に続いて、悪人が惡を離れて律法を遵り、公義を行つたら、過去の罪惡を忘れて、その人を生かす。神は惡人の死を好まない、神に回歸して善道を踏み生きんことをこそ望み給ひ、とある。また反之、折角の義人が義を離れて諸々の惡むべきことをするに到つたなら、過去の義しきことを忘れて、そのあとの罪を審くから死ぬことになる、とある(一八・二一―二四及び三三・一〇―一六を参照)。

人間の現實は善惡、義不義が交錯してでてくることしばしばで、ドラマ的である。神がそれらを如何に判断なさるか。人間の側からは誰も本當の審判はできない。主要な一事は、ひたすら神・キリスト回歸しつつ、転んでも倒れても神の力で前進あるのみ。

7月26日

枯骨の復活

(エゼキエル37: 1-14)

「エホバの御手我にかかり、エホバ我を靈にて出で往かしめ、平原の中に我を坐せしめ給ふ。夥しき骨谷間の原の面に在り。しかも見よ、甚だ枯れたり。彼我に宣ふ「人の子よ、是らの骨は生き還るや」。我言へり「主エホバよ、汝知り給ふ」彼我に言ひ給ふ「これらの骨に預言し、彼らに言ふべし、枯骨よ、エホバの言を聴け、主エホバこれらの骨にかく言ひ給ふ、視よ我汝らの中に靈氣を入らしめて汝らを生かさん。我筋を汝らの上に張り肉を汝らの上につけ、皮膚をもて汝らを掩ひ靈氣を汝らの中に与ふ、」(エゼキエル三七・一―六)

バビロニア軍のため潰滅、捕囚第一次(五九七年)第二次(五八七年)もつらつら体験した預言者エゼキエルは、故国の復興を悲願せざるを得なかった。そのどん底のある日、靈禱の中で、彼は靈にて出で往かされ、戦場に散乱している枯骨を靈視させられた。神から特に「人の子よ」と呼ばれているのは、特別な使命を帯びているからである。「骨は生き還るや」は反語。エゼキエルは信頼深く「汝知り給ふ」と応えた。エゼキエルは神命に従って預言した(三七・七一〇)。枯骨が肉体に戻った。そこに靈氣が息吹かれて、立ち現はれたのはユダの軍隊であった。それは「イスラエル民族全家」の靈徴であった。ダビデ王の昔日の如き民族国家復活の預言である(三七・二四―二八)。

7月27日

神殿の靈水
(エゼキエル47)

凡^九そこの河の流れ往く処にはなべての動く生物は活きん。魚またさはに増しゆかん。この水到る^三処にて醫^いす業をなし、この河の往く処にてはものみな活くるなり。この河の岸辺の此の岸彼の岸に食のため実を結ぶ諸々の樹々生ひ育ち、その葉は枯れることなく、その実も絶ゆることなく、日々に新しき実を結ぶべし。これ正にその水かの聖所より流れ出づればなり。その実は食となり、その葉は薬とならん。(エゼ四七・九、一二)

エゼキエルという預言者は、第四十章から第四十八章まで、果然その祭司面を前面に出だし、神殿中心のふしぎな消息を啓示されている。しかもそれは現実性の瞭かなものと暗示的、神秘性の深いものが交錯している。その神秘性は第一章の虹の消息とふしぎな照応をなしている。そしてこれは、ヨハネの黙示録第二十一、第二十二章に変貌し、現じているとも謂えるふしぎな神の靈水の靈幻である。

総じて預言者たちに啓示されている内容は、神の現実性、現在性を強く現前せしめて終末性とが相照応している書なのである。しかもそれは人類の歴史のものすごい明闇のドラマを舞台としているから、深刻な救済性をもった神の歴史の展開なのである。それゆえ聖書は、眼と耳と手足とからだを聖書の現実の中に投入して身読すべき書なのである。

7月28日

出バビロン
(イザヤ書40:1-11)

「慰めよ、汝ら慰めよ、わが民を！ 語れよ、
エルサレムの心に、これに呼ばはり告げよ。
その服役の期は満ちその罪は赦されたり」。
そはその罪過すべてに對する罰の倍加を
エホバの手より受けたればなり。
「シオンの福音使よ汝高き山に登れ、
エルサレムの福音使よ、汝の声を強く挙げよ。
恐るる勿れ、ユダの町々に告げよ、見よ、汝
らの神！」と。
見よ、主エホバ効力をもて来たり給ふ。
その臂はおのがため統治め給はん。
主は牧者の如くその畜群を養ひ、
その臂にて羔を集め抱き、之をその懷に入れ
て携へ、
乳をふくまする羊を柔に導き給ふ。

(イザヤ四〇・一、二、九、一〇、一一)

第二次バビロン捕囚は紀
前五八七年、捕囚期は五三
八年まで、正に半世紀間で
あった。ベルシャ王クロス
が現はれて、捕囚をエルサ
レムに帰還せしめた。その
背後には神エホバの聖手が
はたらいていた。
ユダ国滅亡は大刑罰で捕
囚半世紀間は正にエルサレ
ム帰還を忍び待つ苦難倍加
の歲月であつた。冒頭の
「慰めよ」の聖句は神の深
い愛憐のひびきである。無
名の大預言者は今し、神が
出現して帰還の先頭に立ち
民を羊群の如く導き給こと
を告げる。



(イザヤ40：11) イスラエルの牧人たる神・キリストの象徴的な相（B・ブロックホルスト）

7月29日

大宇宙の神

(イザヤ書40：12-26)

誰かエホバの霊を導き、その議士となりしや、
視よ、諸々の国民は桶の一零の如く、権衡の
鹽の如し。
神のみ前には諸々の国民みな無きにひとし。
エホバは地球の遙か上に坐し、
地に住むものを蝗の如く視給ふ。
大空を薄絹の如く布き
これを住むべき幕屋の如く張り給ふ。
汝ら眼をあげて高きを見よ、
誰かこれらのものを創造せしやを想へ、
主は数を検べてその万象をひき出だし、
おのおのの名を呼び給ふ。
主の威力大いなる哉！
その力強大なるが故一人も欠くるなし。

(イザヤ四〇・一三…二六)

雄渾壮大なる神觀をこれ
らの詩句に見る。萬国民が
桶の一零にひとしいとは痛
快な言である。また神のみ
前には萬国民は無きにひと
しい。全く人類のあさまし
さ、空しさを喝破した言だ。
左に自作の讃歌を掲げよう。
一涯しも知れぬ大宇宙
銀河の数は何億か
何億光年走るとも
極まりなければその時空
夜空を仰ぎ言なし
神のみ業の神秘さよ
五劫自然には國境なし
幼兒らにも國境なし
いづれの國も神の属
自國の使命自覺して
大指揮者たる神に抛り
交響樂を奏せずや
自作讃歌「最大の芸術家」歌調一
高聲歌「太平洋の波の穂に」

7月30日

鷺の如く翼を張りて

(イザヤ書40:27-31)

ヤコブよ、汝何故に「わが道は神に隠れたり」と言ふや。

イスラエルよ、汝何故に「わが正審は神前を過ぎ去れり」と言ふや。

汝知らずや聞かざるや、神は永遠の神、地の極の創造者にして、

倦み給ふことなく、疲れ給ふことなくその聡明きこと測り難し。

疲れたる者には力を与へ、勢力なき者には強きを増し給ふ。

年若き者も疲れて倦み、壮なる者も衰ふ。

然かはあれどエホバに依り頼む者は新たなる力を得、

鷺の如く翼を張り、翔けりて疲れず、歩みて倦まざるなり。(イザヤ四〇・二七—三一)

イザヤ書は第四十章から第五十五章までを第二イザヤ書、作者は無名の大預言者。

この第四十章は朗々と音読しているうちにおのづから天来の光、力、生命にあづかる。

聖書は天来の文字の波や風のゆたかな書である。特に預言書の中でもイザヤ書が最たるものである。この第四十章はカーライルが世界最大級の詩文だと言った由。

「わが言は霊なり」とキリストは告白なさった。聖書はそのような聖句に溢れている。本書三六六日のどの頁からも天来の霊言が光を発し、愛の力を与え、生命の泉を迸らせている。かくて我らは聖霊の翼で天翔けるが如しである。

7月31日

エホバの僕イスラエル

(イザヤ書41:8-14)

されど汝イスラエル、わが僕よ！^{しもべ}

わが選^{えら}びたるヤコブ、わが友アブラハムの裔^{すえ}よ。

我れ地の極より汝を伴^{とも}れ来たり、地の端^{はし}より汝を召し出だし、

かくて汝に言へり「汝はわが僕、我汝を選^{えら}みて棄てざりき」と。

恐るる勿れ、我汝と偕に在り、驚くなかれ、我汝の神なればなり。

我汝を強くせん、我汝を助く。わが義しき右の腕汝を支へん。

エホバまた宣^{のたま}へり「汝蟲けらなるヤコブ、イスラエル人よ、

懼るる勿れ、我汝を助けん、

汝を贖ふ者はイスラエルの聖者なり。(イザヤ四一・八一〇、一四)

第二イザヤ書の焦点は「エホバの僕」(エベッド・ヤハウエー)に在るのだが、その前奏曲的に謳はれているのが右の詩句である。イスラエル民族は、霊的な人格共同体として「わが僕」と呼ばれている。

全にして個、個にして全の消息である。右腕は力の象徴である。神の力が助けると神自らの宣言。正に本願の効力である。而も、呼ばれたヤコブ・イスラエルはそれ自体「蟲けら」だと言はれているところに、何とも言へぬ現実性がある。神は蟲けらの如き者を選んて僕、即ち神の使命を果す者とし給ふ。私も蟲けらだ。この蟲けらを聖なる神は選^{えら}び贖^{あがな}つて下さった。第十四節は福音そのものである。